

市民の皆さんと市長との懇談会（八原）
～将来のまちづくりについて～

日時	平成 28 年 6 月 11 日（土） 14 時 00 分～16 時 00 分	
場所	八原コミュニティセンター	
出席者	市民	10 名
	市	中山市長 松尾総合政策部長 岡田都市環境部長 企画課：宮川課長，大貫課長補佐，関ヶ原主査，原田副主査 都市計画課：清宮課長，岡野課長補佐，廣津係長，沼崎係長
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の皆さんと市長との懇談会～将来のまちづくりについて～ 次第 ・（仮称）第 2 次ふるさと龍ヶ崎戦略プラン（素案）の概要について ・新都市計画マスタープランの策定に向けた取組について ・常磐線佐貫駅周辺地域整備基本構想（素案）の概要について ・アンケート用紙 	

【懇談会内容】

1. 開会，市長あいさつ

司会より開会のあいさつ，続いて，中山市長よりあいさつ。

2. 市からの説明

(1) 懇談会の開催趣旨について

市より開催趣旨についての説明。

(2) （仮称）第 2 次ふるさと龍ヶ崎戦略プラン（素案）の概要について

(3) 新都市計画マスタープランの策定に向けた取組について

(4) 常磐線佐貫駅周辺地域整備基本構想（素案）の概要について

市より検討状況について，スライドを用いて説明。

3. 意見交換

- ・ （市民）人口を増やすことだけを考えず，ロボットを活用することは考えられないか。
 - （市長）人工知能も発展しており，介護では実際にロボットを利用している事例もある。技術の発展は未知数だが，社会環境が大きく変わることはあり得る。
- ・ （市民）「消滅自治体」という言葉があるが，茨城県の県北は深刻な状態である。人口減少の課題には，女性の人口減少を止めることが大切である。
 - （市長）隣接する河内町も消滅可能性都市となっており，県北には限界集落が点在している。子育て世代が魅力を感じ，子どもたちが龍ヶ崎市に残り，次の世代につないでいくような，人口の安定した自治体であることが目標である。また龍ヶ崎市内では墓地が不足しており，周囲の牛久市などに墓を購入し，そこを生活の拠点としてしまう問題もある。ふるさと意識の向上のためには対策が必要である。

また、雇用創出はどの自治体も同じようなことを考えている。龍ヶ崎ならではの雇用創出も必要である。様々な取組を通して魅力を創出し、安定した定住都市となるように努めていきたい。

- ・ (市民) 全国の自治体と同じ計画のように思う。「子育て環境日本一」の切り口で市政を見てみると、近所の公園では雑草が繁茂しており、幼児が遊べる環境ではない。保育や学童保育の現状はどうか、指導員の質はどうか、医療費の補助はなどの視点が必要である。国や県の基準を満たしているだけで日本一と言えるのか。
 - (市長) 龍ヶ崎市は人口一人当たりの都市公園面積が充実しているが、維持管理が困難な所がある。お気づきの点があれば、自治会等を通して市に伝えてもらえれば、順番に対応していく。「子育て環境日本一」については、数字だけの争いになると不毛である。環境や雰囲気づくりが大切である。龍ヶ崎市では待機児童はゼロである。ただし、タイミングにより 0 才児は待機が出る場合もある。希望する保育園に入れない課題もあるが、送迎ステーションがあることで、補填できると考えている。
 - (市長) 学童保育は、周辺地域の中ではいち早く小学校 6 年生まで拡充した。スペースの確保も課題である。同様に、医療費は中学生までは医療福祉費支給制度が受けられるようにした。所得に関係なく受けることができる。ただし、こうした先進的な取組も周辺の自治体が追いついてきてしまっているため、次の一手を考える必要が出てきた。子育て関係の施策も先手を打ってきたが、周辺自治体との差は詰められてきているのは事実である。
- ・ (市民) 内容が多岐にわたっており、意見を述べてくださいと言われても回答が難しいが、環境負荷・貧困対策・近隣自治体との位置付け・国や県の計画との関係性などについては無いか。また、前回のプランの目標と今回の目標のつながりの説明がなかった。策定のプロセスも含めて説明してほしい。
- ・ (市民) 資料の中の、重点戦略、基本目標、重点目標、などの言葉の違いがわからない。
 - (市長) 資料の分かりやすさは、今後改善していきたい。
 - (松尾部長) 「ふるさと龍ヶ崎戦略プラン」を策定するにあたり、少子高齢化、人口減少は避けられないと考え、自助・共助・公助のバランス良く支え合うことを目的に「市民活動日本一」を掲げ、少子高齢化に対しては「子育て環境日本一」を掲げた経緯がある。
 - (松尾部長) 自治体が作成する戦略プラン＝昔の総合計画は 10 年程度のスパンが多いが龍ヶ崎市では状況の変化に対応できるよう 5 年計画にしている。この 5 年でも社会環境への認識がだいぶ変わった。少子高齢化・人口減少が避けられないとの認識が共有されつつある。今回素案を作成するに当たり、前回の策定時より人口減少がより顕在化されたため、まちづくりのキャッチフレーズを引き続き使

用することになった。

- (松尾部長) 今後、高齢者の絶対数が増え、要介護認定者も増えてくる。これは、当事者、地域、自治体にとっても負担が多く、不幸なことである。健康維持を目的に、日常的にでも歩く活動の取組等を推進するため「スポーツ健幸日本一」を掲げた。
- (松尾部長) さらに、空き家の増加も予想される。ニュータウンの空き家などでは、新耐震基準(1981年以降)を満たしているものが多く活用価値が高い。設備や間取りなどを変えれば、比較的低廉で、質の良い住宅を供給できる。若い世代に上手に仲介をすることで人口構成のバランスを良くする事につなげていきたい。今回の重点目標には、様々な要素がちりばめられている。
- ・ (市民) 「子育て環境日本一」をうたうことはやめた方がいい。同じようなことが全国でうたわれており、インパクトがない。うたわなくても当たり前に取り組んでいることで良いのではないか。
- ・ (市民) 牛久市に人口を抜かれた経緯もある中で、他都市と同じ取組では意味がないのでは。今後周辺の市町村と合併しないのであれば、県南の中での龍ヶ崎の位置付けも考えるべき。
 - (市長) 広域化は、一部事務組合や広域行政の枠組の中で既に取り組んでいるものもある。稲敷地方広域市町村圏事務組合の発足時は、市は龍ヶ崎のみだった。阿見町が加わるなど最近手厚くなった。同広域組合のエリアの会議にて、コミュニティバスの広域運用化などの議論が行われる。
 - (市長) 道の駅に関しては、龍ヶ崎として整備を進めるが、牛久市とも連携を取っていく必要がある。他周辺自治体4市とも連携し、牛久沼の回遊性を上げることが必要である。
 - (松尾部長) シティープロモーション等を各市町村で取り組む事も大切だが、それだけでは難しい面もあると考えている。常磐線沿線のイメージが悪い中で、一つの自治体だけが頑張っても変わらない。常磐線沿線のイメージアップにつなげるための勉強会を県境にとらわれず沿線の各自治体と進めていきたい。
- ・ (市民) 北竜台ニュータウンができた当時は、東京までの通勤者がほとんどであったが、今後本当に若い世代が住んでくれるのかは疑問である。現在は、つくばや成田方面に仕事先がある方が多い気がする。龍ヶ崎市内でも働けるように、仕事環境を充足する必要がある。
 - (市長) 戦略としてどの自治体も雇用創出を行っているため、独自色を出すことが難しい。龍ヶ崎市では、学生に保育士の資格取得を金銭的に支援し、卒業後も市内で働いたら返済を不要とするなど、大学立地の環境を積極的に活用していく考えである。

以上